

(研究報告) 抄録用紙

演題名 (全角 80 字以内)	本人と家族の一致した意思により在宅で鎮静を行ったが、家族に罪悪感を残した間質性肺炎の一例
演者名	彦坂由季 松宮泉 矢治早加 椎名一彦 大高正裕
所属	大高在宅ケアクリニック

研究方法 (右から番号を選び NO. 欄に番号をご記入ください)	1. 症例報告	2. 症例シリーズ報告	3. コホート研究	NO.
	4. 症例対照研究	5. 調査研究	6. 介入研究	7. 二次研究
8. 質的研究				
9. その他研究				

目的

呼吸困難と不安が強い進行した間質性肺炎患者に対して在宅で鎮静を行ったが、鎮静の経過が家族の負担になり、患者亡き後罪悪感を残した症例を経験したので報告する。

方法

A氏60歳代男性。間質性肺炎。免疫抑制剤で治療を行ったが進行し、在宅酸素療法と呼吸困難に対しモルヒネ内服を開始。診察時には頻呼吸で発語の少ないA氏にかわり妻が不安や要望を代弁した。A氏は人工呼吸器と胃瘻を希望しないと意思表示した。次第に睡眠薬でも入眠困難になり「苦しい」と繰り返した。妻に予後が差し迫っていることを伝えた上で鎮静の提案をした。数日後にA氏が子どもたちをベッドサイドに呼び、気がかりや頼み事を伝えるのを見届けたあと、妻が本人に意思確認をしミダゾラム持続皮下注入の開始を希望した。30mg/日まで増量したが呼吸困難は緩和されなかった。モルヒネ持続皮下注入を提案したがA氏、妻とも受け入れられず、ミダゾラムの増量と共にPCA（Patient Controlled Analgesia）機能の使用を開始。A氏が苦しそうな時に妻がPCAスイッチを押して1時間量を早送りした。その結果、うなづく程度の意思表示ができ苦痛なく過ごせる時間が得られた。鎮静開始15日目に永眠された。1ヶ月後、妻が診療所を訪れ「自分が夫の命を縮めてしまったのではないか」と話した。

考察

鎮静開始後に、在宅での薬剤投与量の頻回な調整が困難であったことからPCA機能の使用を開始した。妻は自らスイッチを押す行為を無我夢中で行っていたが、A氏亡き後に振り返った際に、自分が手を下し夫が亡くなったと感じられたのだろう。妻の「命を縮めてしまった」という言葉から、妻の中にあった倫理的な葛藤と精神的つらさに気づかされた。在宅での鎮静では、患者と共に生活する家族が鎮静の経過で直面する倫理的な葛藤や精神的つらさへの配慮と、鎮静方法への注意が必要である。